

聖書：ピリピ 4：1～3

説教題：主にあって一致して

日時：2017年4月23日（朝拝）

ピリピ人への手紙の最後の章に入りました。ここから新しい話が始まるのかと思いますが、1節は「そういうわけですから」と始まります。つまりこの1節は前の3章最後の部分とのつながりで見ると必要があることとなります。3章17節でパウロは「兄弟たち、私を見なう者になってください。」と書いていました。その意味は、さらにその前の部分で見たように、「後ろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っている」パウロの姿にならうということでした。なぜそうかと言えば、ピリピ人たちの周りにはそうでない人々が多くいたからです。地上のことにばかり思いを向け、自己満足に陥り、上に向かって前進する歩みをしない人たちが多くいた。そんな中、パウロはピリピ人たちに、キリスト者に与えられている素晴らしい特権について20～21節で語りました。第一に私たちの国籍は天にあること。第二にその天からキリストが救い主としておいでになるのを私たちは熱心に待ち望んでいること。第三にキリストはやがて来られる再臨の日に私たちにご自身と同じ栄光のからだを与えてくださること。パウロはこれらのメッセージを受けて、「そういうわけですから…しっかりと立ってください」と4章1節で語っているのです。「しっかりと立つて」というのは、ぐらぐらせず、どっしり立ち続けることです。堅忍の歩みのことです。そのためのカギは、今見たキリスト者に与えられている希望をしっかりと心に抱くこと。国籍が天にあること、そこからキリストが救い主として迎えに来て下さること、そして私の弱いからだをご自身と同じ栄光の姿に変えて下さること。この希望を抱いて、パウロのように上に向かって走る生活、キリストを益々追い求め、似た者となることを求めて日々前進する生活をするように！と勧めているのです。

この勧めを語る際、1節で目立っているのは、パウロがピリピ人たちに対して幾通りもの仕方で自分の愛情を表現していることです。ここには5つの表現があります。1つ目は「兄弟たちよ」。2つ目は「愛する者たちよ」。3つ目は「慕う者たちよ」。4つ目は「私の喜びよ」。5つ目は「冠よ」。パウロが勧めの言葉を語る前に、まずこのように彼らへの愛を現すことに心砕いているところに、パウロの低い姿勢、謙遜さを見させられます。パウロは使徒として、もっと上から権威を持って命じても良いはずですが、ピリピ

人たを救いに導いた恩人として命令口調で指図しても良いはずで。しかし彼はそうしていません。ここに私たちが学ぶべき良き模範があると思います。

人に何か勧めをする際、注意しなければならないことは、ただその言葉を語るだけでは不十分であるということです。相手のために良かれと思い、励ましになると思って何かを言ってあげても、それが相手の益にならないことが良くあります。ある本にこう書いてありました。「助言というものは、頼まれたものでない限り批判を含むものである。」
「人は、他の人間を非難することによってだけではなく、助言することによっても辱しめることができる」と。その人は良い気持ちでアドバイスしようと思ったかも知れませんが、ただそれを語るだけでは上から目線で相手に×印をつけているのと同じになってしまう。そしてその助言がかえって相手の心を傷つけ、前向きの行動を取らせなくする、逆に反対の歩みを促す結果にもなるということです。そういう意味でパウロの手紙から多くのことを学ぶことができます。彼は至るところで相手への感謝、尊敬、また自分の愛情を十分に表すこととセットで勧めの言葉を語っています。そして先ほど見た5つの呼びかけを重ねて勧めの言葉を語った後にも、1節最後でもう一度「私の愛する人たち」と繰り返しています。彼らに対する思いが誤って受け取られないようにするための配慮でしょう。私たちが誰かに何かを語る時の良い模範をこのパウロに見ます。もちろんこれは単なるテクニックではなく、相手のことを真に思い、相手の益に仕えることを第一に願う心のなせるわざでしょう。

さて次の2節に目をやると、私たちはびっくりします。そこではユウオデヤとストケが名指しされ、「主にあって一致してください」と勧められています。ということは、この二人は仲違いしていたということなのでしょう。パウロは1節で「主にあってしっかりと立ってください」と勧めましたが、ピリピ教会がそのように歩むためには、その妨げとなる問題があることを彼は思わずにいらませんでした。それがユウオデヤとストケの問題であったのです。もしかするとこの重大でデリケートな問題を取り扱うことを念頭に置いたからこそ、パウロは1節で見た、あの自分の愛情を吐露する言葉を重ねて、慎重を期したのかもしれませんが。さてこのユウオデヤとストケはどういう人たちだったのでしょうか。3節に「彼女たちを」とあることからして二人は女性であったことが分かります。また3節後半に「福音を広めることで私に協力して戦った」人たちとも言われています。そう言えばピリピ教会は、使徒の働き16章に記されていますように、女性たちから始まった教会でした。パウロは通常、新しい町ではまずユダヤ人の

会堂に行って宣教するのが常でしたが、この町に会堂はなく、パウロは祈り場があると思われた川岸へ行って、そこに集まっていた女性たちに福音を語りました。そしてその中の紫布商人のルデヤという女性が最初の回心者となり、ピリピ伝道に大きな役割を果たしました。またピリピの次に伝道したテサロニケや次の町ベレヤでも、多くの者が信仰に入り、貴婦人たちが少なくなかったと記されています。おそらくこのユウオデヤとストケも、ピリピ教会の初期の時代から重要な働きをして来た人たちだったのでしょう。そしてパウロがこの手紙を書いた時も、中心メンバーだったのでしょう。なのにその二人の姉妹たちが難しい関係にあった。具体的に何が問題だったのかは分かりません。パウロの言葉からして福音の真理に関する不一致ではなかったようです。もっと個人的な人間関係上の問題であったと思われる。もしかして婦人会の会長と副会長の関係にあるような人たちの争いだったのかもしれない。いずれにせよ、ピリピ教会がしっかりと立つ歩みをするためには解決しなければならない課題だったのでしょう。パウロはこの問題についてどのように勧めているのでしょうか。三つのことを見たいと思います。

まず一つ目に彼が言っていることは「主にあって一致してください」ということです。その際、パウロは「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます」と言っています。二人をまとめて「ユウオデヤとストケに勧めます」と言わず、一人一人の方を向いて「あなたに勧めます、あなたにも勧めます」と言っています。そして「主にあって一致してください」と言います。「主にあって」という言葉は、私たちが手紙やメールの最後に良くつけますが、そのあまり意味を良く考えなくなっているかもしれません。ここには深いメッセージがあります。それはお互いは同じ一人の主に結び合わされているということです。私たちが結ばれているキリストはただお一人です。そのキリストに二人の姉妹はどちらも結び付けられています。ですからこの主にあって二人が一致できないはずがありません。キリストをバラバラに分割しない限り、です。ここの「一致する」と訳された言葉は「同じことを思う」という意味です。主と一つに結ばれている者たちとして、彼女たちは同じことを思うことができるのです。私たちはしばしば誰かとの一致を考える際、「主にあって」ではなく、「自分にあって」一つになろうとします。すなわち自分の土俵で物事を考え、相手が自分と同じ土俵に乗ってくれるなら一つになろうとする。これでは一致は限りなく難しい。しかし私たちは「主にあって」一致するようにと言われています。ですから私たちはまず自分が主に結ばれているとはどういうことなのかを良く考えなければなりません。では私たちが結ばれているところの主はどんなお方でしょう。そのことは2章で見ました。実は2章2節でも同じ言葉が使われていて、そこで

は「あなたがたは一致を保ってください」と訳されていました。その一致のカギとして、そこではキリストの姿が示されました。4節以降にあるように、それは自分のことだけではなく、他の人のことも顧みるといふ姿でした。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えないで、ご自分を無にし、実に十字架の死にまでご自身をささげてくださいました。そのキリストに連なり、キリストがしてくださったことに心から感謝しているなら、そして自分もその方にならって歩みたいと願うなら、その主にあって一致できない信者はいるはずがありません。私たちの主がそこまでへりくだり、低くなって仕えてくださったのに、私だけがその方につながっていると言いながら、ふんぞり返っていて良いもののでしょうか。まず自分が主にあること、主と結ばれていることを良く考えること。そこから自分の行動が導かれて行かなければなりません。

二つ目にパウロが言っていることは、他の人の助けも必要であるということです。3節でパウロは「ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。」と言っています。パウロはユウオデヤとストケの問題は彼女たちの個人的問題であって、他の人は関知する必要はないとは言っていません。教会はキリストにある一つからだです。「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶ」とIコリント12章で言われている通りです。ですからユウオデヤとストケにまず語られる必要があるとは言え、教会の他のメンバーにも語りかけられています。ところでこの真の協力者とは誰でしょうか。この言葉は「くびきをともにする者」という意味です。だからこれはパウロとくびきをともにする親しい同労者を指しているのではないかと言われます。そしてそれはエパフロデトではないかとか、シラスではないかとか、ルカではないかなどと言われます。あるいはこの言葉はギリシャ語では「スズゴス」という言葉ですが、そういう名前の人だったのではないとも言われます。決定的なことは分かりません。しかしピリピ人たちには誰のことか分かったのでしょうか。いずれにせよ、周りの支え、助けが必要であるということです。

パウロはその彼に言います。彼女たちは「福音を広めることで私に協力して戦ったのです」と。パウロはこう述べることによってユウオデヤとストケを高く評価しています。この二人は決して教会の単なるトラブルメーカーではなかった。ピリピ教会が現在あるようになるために特に奮闘し、苦闘して来た人々であった。パウロはその際、「クレメンズや、そのほかの私の同労者たちとともに」と言います。クレメンズについても

詳しく分かりませんが、ピリピ教会ではよく知られた人だったのでしょう。彼の名を上げれば、ユウオデヤとスントケの戦いぶりも良く思い起こされる、そんな人だったのでしょう。つまりパウロはそのような大きな働きをして来た人たちとして敬い、尊敬して、助けのわざをするようにと述べているのです。

そして三つ目にパウロが述べていることは「いのちの書に名の記されている」ということです。新改訳を見ると、この言葉はクレメンスにだけかかるように読めなくもありませんが、原文ではこの言葉は3節の一番最後にあって、この節に名が記されている人全員—ユウオデヤとスントケも含めて—にかかると見る方が適切と思われます。思い起こされるのはルカの福音書10章20節におけるイエス様のお言葉、「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」というお言葉です。またヨハネの黙示録には「いのちの書に名を記されていない者は、云々」といった表現が繰り返し出て来ます。パウロはこれによって何を言っているのでしょうか。それはピリピ教会に集まっているクリスチャンたちは、単なる人間的集団ではないということでしょう。彼らはみな天の家族です。やがての日に御国で永遠にともに住む者たちです。「いのちの書に名が記されている」特別な恵みにあずかっている者たち。こういう目でお互いを見るのが一致の問題では大切であるということではないでしょうか。地上の教会生活では人間関係が難しいと思う人もいるでしょう。しかしやがてその人とも天で永遠に住むと考えるとどうでしょうか。え～あの人と一緒に？それじゃ天国でなくなってしまう！と言うのでしょうか。まさかそんな風に私たちは人のことは言えないでしょう。あの人だけがただ恵みによって天国に入ると同様に、私もただ恵みにより、天国に入れていただく者です。そのことを思うなら、天に行ってからしぶしぶ和解し、地上でのお互いの関係を振り返って恥じ入るよりは、今ここにある時から、将来永遠にともに住む家族として和合して生きる方が良いのではないのでしょうか。むしろ私たちは将来一緒に住むことを心から信じている者として、今ここにある時からそのように生きることが主に喜ばれること、また主の恵みにお答えし、御名を賛美する生き方なのではないのでしょうか。

今日の箇所を読んで思われること、それはピリピ伝道の初めから仕えて大きな働きをして来たユウオデヤとスントケでさえも、このように一致について勧められる必要があったということです。それなら私たちはなおさら多くの人との間に一致の課題を持っている者として、今日の勧めを他人事ではなく、自分に対する勧めとして受け取るべきではないのでしょうか。パウロは「主にあって一致して」と言いました。私たちも自分が

主にある者とされていることを良く考えたいと思います。主は私たちのために最も低き所にまでへりくだってくださいました。その主に感謝している者として、私たちもお互いとの関係において、この主を映し出す歩みをすべきではないでしょうか。また私たちはいのちの書に名を記していただいた者です。お互いは主の恵みにより、天で永遠にとともに住む者たちとされています。そのことを見上げて、この主の恵みが地上でも見えるように私たちは歩んで行くべきではないでしょうか。そして仮に自分が不一致の当事者でなくても、教会が主にあって一つ思いで歩むために、他の兄弟姉妹の関係を心に留めて必要な助けをする者でありたいと思います。パウロのような低い心、相手に対する愛と尊敬を十分に表すことをもって。そうして互いの一致を保つところから、1節で言われている通り、主にあってしっかりと立つ歩みへ、この世に主の救いの素晴らしさをその姿をもって力強く証しする主の教会の歩みへ導かれたいと思います。